

# 山形に避難、福島のママ サークル設立めざし座談会

## 同じ立場同士話したい



ご意見、ご感想は山形新聞報道部子育て係 ファクス023(641)3106、メールkosodate@yamagata-np.jp、〒990-8550、山形市旅籠町2の5の12まで



真剣な表情でサークル名を考えるママたち。古里への思いから福島にちなんだネーミングが候補に挙がった



サークル設立に向け話し合うママの傍らで、同年代の子どもたちが楽しそうに遊び回る

東京電力福島第一原発事故に伴い、放射線のわが子への影響を心配し、福島県から山形県に自主避難するママが増えている。そんな中、山形市に自主避難している母親たちのサークル設立を目指した座談会が9月下旬、同市南沼原コミュニティセンターで開かれた。伊達市や二本松市、郡山市などから避難した母親7人が子ども連れで参加し、どのようなサークルをつくりたいかを話した。それぞれが避難生活で抱える葛藤や不安も話題に。共通するのは「同じ立場のお母さんと話したい」という気持ちだった。座談会の模様を紹介する。

自己紹介では、それぞれのママたちが避難生活で感じている不安を口にした。「知り合いがいない」という悩みを打ち明けたのはAママとCママ。Cママは「子どもを外で遊ばせることができるようになって、すごくうれしい。ただ、山形には知り合いがいない。同じ立場のお母さんたちと会うことができると、少し安心して話すと緊張が解けたのか涙ぐんだ。娘2人と身を寄せるとママは、放射線の不安から解放された一方で、避難期間が見通せないことに不安がある。このまま山形にいていいのかなと毎日悩んでいる」

## たまった不安、吐き出し「スッキリ」

話題は、どんなサークルが必要かという内容に移った。NPO法人やまがた育児サークルランドでは、福島などから避難してきたママたちが対象の交流会「ままカフェサロン」も月3回ペースで開いているが、100人以上参加することもある。「ままカフェサロン」も参加者がすくなく増えてきているよね。勇気を振り絞って出掛けたのに、参加者が多過ぎて友達ができずに帰っちゃうママもいる」とDママ。Gママは「1回会っただけでは、子ども同士のように打ち解けられない」と、比較的少人数のサークルを提案した。

Bママは避難生活が流動的なことを指摘する。「自主避難しているママたちには『いつまで山形に居るのか分からない』という事情がある。家族の状況によっては来月戻る、なんていうこともあるわけだから、それぞれ抱えている事情が違うから、そこは考えた」と話した。

「放射能に対するストレスに比べたら、普通に暮らせることがどんなにいいことか…」

夫(27)と離れ、山形市内のアパートで長女(3)、次女(2)と避難生活を送るDママ(27)は、娘を山形市内の保育所に特定保育で預け、仕事を続けている。子育てをしながら週3回ペースで伊達市に通勤し、実家の自動車修理工場で経理の仕事をする。遠距離通勤は「そんなに大変じゃない」と言い切り、「放射能に

### 「いつ帰る」も悩み

対するストレスに比べたら、普通に暮らせることがどんなにいいことか…」と続けた。もちろん、避難せずに地元で暮らせるのが一番いい。会社員の夫は福島市内の実家で暮らし、伊達市の自宅には誰も住んでいないが、いつでも帰ることができるように光熱費などは払い続けている。Dママはそうした葛藤のみ込

むように「山形に来て良かった、と思わなきゃいけない」と話す。地元でも放射線に対する危機感に温度差はある。わが子のことを考えたらDママは避難をしたかったが、そのことを口にする雰囲気ではなかった。放射線の不安を口にする事で周囲の人が嫌な気持ちになってしまつたのではないかと思い、今も話題に

しない。「山形では(自主避難してきた)同じような感覚の人と知り合うことができ、連帯感がある」と言う。二本松市から3歳の長女、8カ月の次女と避難するBママ(31)。山形で仲良くなったが、福島県に戻っていったママもいる。「山形に来て放射能の心配はなくなったけど、今度はいつ福島に帰りたいか

いやないといけないと思う」サークルで話したいことは、何といてもおしゃべり。言いたいこと、聞いてほしいことがいっぱいあった。ママ同士しゃべれば、明日からまた子育て頑張らなくていいよ」と話すEママに、Dママも「今はまず、福島のお母同士でしゃべる空間が欲しい。その次に山形のお母さんたちと交流したい」と続けた。